公益財団法人大林財団

研究助成実施報告書

助成実施年度	2020 年度
研究課題（タイトル）	長谷川逸子の公共建築における使い手の創造　山梨フルーツミュージアムを中心に
研究者名※	平野　千枝子
所属組織※	山梨大学大学院 総合研究部 准教授
研究種別	研究助成
研究分野	都市建築史、都市と文化
助成金額	130 万円
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります。

（　）は、報告書提出時所属先。

（研究報告-様式 2）

大林財団２０２０年度研究助成実施報告書

所属機関名　　山梨大学
申請者氏名　　平野千枝子

研究課題	長谷川逸子の公共建築における使い手の創造　山梨フルーツミュージアムを中心に

（概要）※最大 10 行まで

長谷川逸子の公共建築では、住民との交流を重ねて設計を進める方法が先駆的に実践された。またそこでは、土地の歴史や現在のニーズをとり入れるだけでなく、その場所での活動を未来に向けて開いていこうとする工夫がなされていた。本研究は、長谷川のこうした建築の特質を個々の実践に即して考察した。特に、山梨フルーツミュージアム（1995 年）をとり挙げ、その建設の経緯、運営の変遷、使い手の活動を調査した。建築の創造的な可能性は、完結した作品のうちにあるのではなく、さまざまなネットワークのなかにある。建築の創造性を生かすには、このことを十分認識しなければならないだろう。

１．研究の目的　　（注）必要なページ数をご使用ください。

本研究の目的は、竣工から 25 年以上を経た長谷川逸子設計の建築「山梨フルーツミュージアム」（以下、フルーツミュージアム）を、訪問者や利用者（使い手）がどのように使ってきたのかを、可視化することであった。フルーツミュージアムは、山梨県笛吹川フルーツ公園（以下、フルーツ公園）内の施設で、3つのドームと地下展示室からなっている。

長谷川逸子の公共建築では、住民とのワークショップを重ねて設計を進める方法が、先駆的に実践された。また個々の実践には、建築が立つ土地の歴史を踏まえるという保守性にとどまることなく、そこでの活動を未来に向けて開いていこうとする工夫を見ることができる。少子高齢化や製造業の空洞化によって地域社会の存続が喫緊の課題となっている現在、建築の設計が地域に働きかけるこのような創造性は、一層重要なものとなるだろう。だが一方で、過疎化が進み地方の財政が厳しさを増すなかで、公共建築の建設や運営の継続には大きな困難が伴っていることも事実である。

本研究ではこうした現代の条件のなかで公共建築がもつことのできる意義を明らかにするために、山梨の人々に 25 年以上にわたって親しまれてきたフルーツミュージアムに注目し、この建物がどのように作られ、どのように使われてきたかを調査する。建築史上の様式分析という観点をこえて、建築がどのように使い手の創造に結びついているかを示すことを、研究の目的とした。

２．研究の経過　　（注）必要なページ数をご使用ください。

本研究の計画は、(1) 長谷川逸子の公共建築の研究、(2) 山梨市フルーツパーク株式会社の資料調査、(3) 山梨市を中心とした教員との協力体制の構築、(4)「フルーツ公園の思い出」についての作品の募集、(5) 研究のまとめ、としていた。この計画に沿って、研究の経過を述べる。

(1) 長谷川逸子の公共建築の研究

実地調査と、文献による研究を行った。長谷川の公共建築への取り組みを方向づけた「湘南台文化センター」(1990 年、以下竣工年)、集大成と言える「新潟市民芸術文化会館」(1998 年) を中心に、建築以前のソフト作りから携わった「大島絵本館」(1994 年)、フルーツミュージアム同様に植物園の要素がある「氷見海浜植物園」(1996 年)、珪藻土や笛など地域の自然と文化をとりいれた「珠洲市多目的ホール」(2006 年) を調査した。それぞれ写真撮影、職員への聞き取り、ワークショップや公演など実際に施設を使用している状況の見学を行った。新潟市民芸術文化会館では、設立時のワークショップの聞き取り調査も行った。

また文献によって、上記の施設の設計や建設の経緯を調べた。そして、1960 年代の国家的プロジェクトや都市形成の時代を経た、1970 年代以降の建築家の取り組みのなかに、長谷川逸子の公共建築を位置づけた。特に長谷川がその事務所や研究室に在籍した菊竹清訓、篠原一男の著作との比較から、その位置づけを探った。

(2) 山梨市フルーツパーク株式会社の資料調査

山梨県笛吹川フルーツ公園の公園事務所と、県の都市公園を主管する山梨県県土整備部都市計画課の担当職員に資料を探していただき、以下を閲覧できた。山梨県・(株) 森緑地設計事務所『県単都市公園建設設計委託 笛吹川フルーツ公園フルーツミュージアム基本設計・設計図 平成４年３月』(1992 年)、山梨県・(株) 森緑地設計事務所『県単都市公園建設設計委託 笛吹川フルーツ公園フルーツミュージアム基本設計報告書　第 2 編 運営設計　平成 4 年 3 月』(1992 年)、 山梨県・(株) 森緑地設計事務所 『県単都市公園建設設計委託 笛吹川フルーツ公園フルーツミュージアム基本設計報告書　第３編 資料編　平成 4 年 3 月』(1992 年)、長谷川逸子・建築計画工房 (株)『山梨県笛吹川フルーツ公園フルーツミュージアム建設工事設計主旨説明書』(1993 年)、株式会社森緑地設計事務所 『フルーツ・ミュージアム (仮称) 展示造園実施設計　展示リスト 『くだもの百科』展示室 『くだもの工房』フルーツ市場　平成 5 年 3 月』(1993 年)。

しかしこれらは設計時の資料であり、現在の管理者以前に運営を担っていた山梨県公園公社や山梨市フルーツパーク株式会社の活動を示す資料は見いだせなかった。そこで、山梨日日新聞のデータベースおよび山梨県立図書館収蔵の県広報資料から、フルーツ公園の運営と設備の変遷、イベントや市民グループの活動を一覧化した。

(3) 山梨市を中心とした教員との協力体制の構築

(4) 「フルーツ公園の思い出」についての作品の募集

本研究課題には、本学教育実践創成講座 (教職大学院) の現職教員を含む学生と、フルーツ公園での児童・生徒の活動について話し合うなかから発想した部分があった。そこで、子どもたちがフルーツミュージアムをどのように体験しているかを探るために、院生や教育学研究科美術教育専攻の卒業生を中心とした教員との協働の可能性を探った。夏期に教員とのセミナーを行う計画であったが、感染症第 5 波による準備の遅れ、並びに学校現場の業務逼迫等があり、また集まること自体も難しかった。そこで、(1) (2) の調査を映像にまとめ、セミナーの代替として山梨市内の学校に公開した。この映像によって、フルーツ公園の建設の経緯と建築の特徴、調査の趣旨を説明した。その上で、山梨市の全ての小・中学校と県立高校、加えて建築科を持っており大学の近くにある甲府工業高校の児童・生徒に対してアンケート調査をおこなった。児童・生徒がフルーツ公園をどのように利用し、どのような体験をしているのかがわかるような設問とともに、

建築に対する認識を探るためにスケッチを描いてもらい、多くの回答を得ることができた。

また、研究計画では、セミナーで農業従事者、加工品製造業者、本学生命環境学部教員にフルーツミュージアムに対する意見を聞くことを想定していたが、質問用紙による調査を行うことにした。その際、上記映像の内容に準ずる建築の解説と、地下展示室の展示物および解説パネルの書き起こしを作成し、参照してもらった。桃農家、ワイナリー、果樹の研究者、山梨市在住のアーティストに依頼して、それぞれの立場からの回答を得ることができた。

(5) 研究のまとめ

2022 年 3 月 19 日に「セミナーと研究報告　庭園/植物/公園」を開催した。計画では本研究の契機となったアーティストのダン・グレアムを招聘する予定であったが、セミナーを準備した 2021 年 12 月段階でアメリカからの渡航は難しく、グレアム氏はオンラインでの参加を希望していたが 2022 年 2 月に急逝された。これまでの調査から、フルーツ公園がルネサンス以来の庭園の様式を踏まえていること、フルーツというテーマが、生産としての農園と象徴的な意味を担った庭園を結びつける主題であることから、第一部では庭園史の専門家に果物を含む植物と庭園の関係をレクチャーしてもらうことにした。これに加え、第二部として、上記(1)～(4)の報告を行い、長谷川逸子の「ランドスケープ・アーキテクチャー」の考え方を歴史のなかに位置づけた。計画の通り、2022 年度内に論文にまとめて公表する予定である。

３．研究の成果　　（注）必要なページ数をご使用ください。

(1) 長谷川逸子の公共建築について

長谷川逸子は大学卒業後、菊竹清訓事務所で大規模な建築の設計に参加したことを「その設計のテーマは公共性や共有性そして人間性などで、その実体のなさからくるのか、自分のめざしているものとはかけ離れすぎていると感じてしまいました。パブリックという言葉がもつ虚構性と客観性に、リアリティがもてないでいるという状態でいました」と述べている [1)]。同世代の多くの建築家と同様に、長谷川は身近な知人の住宅設計から自身の仕事を始め、クライアントとの対話は当然のことであった。1986 年に清家清を審査委員長として行われた藤沢市「湘南台文化センター」のプロポーザル・デザイン・コンペティションで最優秀となったことが、その公共建築の出発点となった。建設予定地が、かつて住民が植物を採り、お祭りをした丘とはらっぱだったことから、新たな自然としての公共空間が構想された。この時、住民との対話の場を組織し、提案を説明して調整していった。そこから敷地がもつ歴史の継承、住民の参加、活動内容（ソフト）の重視、五感に働く光や空気のデザイン、移動を誘発し、フレキシブルに利用できる空間という、長谷川の公共建築の基礎が築かれた。長谷川は振り返って、「私たちにとって必要なのは大文字の公共概念の提出ではなく、具体的な小文字の公共をいろいろなアイディアを試みながら実践していくことではないか。一口に公共といって八千人の公共と六万人の公共と五十万人の公共と一千万人の公共は異なるし、それとは逆にふたりいれば、そこにはすでに公共空間の基本問題が現れているともいえるだろう」という [2)]。

多木浩二はすでに 1987 年、長谷川の建築を「より大きな世界の動いている網目の一つとして、あくまで部分的で、未完結な断片として認識すること」と評し、そこでは建築を完結した体系と捉える磯崎新や篠原一男のような建築の理論や実践も、ほとんど意味をなさなくなる、と指摘した [3)]。建築写真で長谷川建築の外形を見るならば、そのデザインにポストモダンの様式を指摘す

ることになるだろう。しかしその後の建築にとって重要なのは、ネットワークを前提としたそのエコロジカルな世界観である。同じく 1960 年代末から活動を始めたアーティストのダン・グレアムは、山梨フルーツミュージアムについて、「彼女の作品は 70 年代のエコロジカルな関心と今のコミュニティへの関心とによって成り立っており、非常に素晴らしいもの[4)]」だと述べており、彼らに共通の問題意識があったことが確認できる。

(2)山梨県笛吹川フルーツ公園フルーツミュージアムについて

山梨県笛吹川フルーツ公園は、1985 年の山梨県大規模公園整備構想のなかで花とフルーツとワインの公園として提案され、1989 年に山梨市に建設が決定、県土木部がハード面、農務部がソフト面を中心に計画した。1992 年に公園内の施設であるフルーツミュージアムの計画が策定された。

1992 年の長谷川によるドローイングでは、フルーツミュージアムのドームの形は、飛来してきた種子の大地に対する異なる接し方とされる。ぶどうや桃などの果物は、この地域の気候や地形によって培われてきたが、最初は外からやってきた外来種である。だからここには土地の固有性のみならず、エコロジカルな広がりをもつイメージが提示されていたといえよう。また同時期のドローイングには、「ランドスケープ/アーキテクチャー/一体化」という書き込みがあり、のちに語られる「ランドスケープ・アーキテクチャー」の考え方も表れている[5)]。

ところが長谷川はフルーツミュージアムについて、最初に書かれたソフトが面白かったから建物づくりに参加し、ハードだけつくればいいと思っていたが、最終段階で書かれていたソフトが現実にジョイントされていないのに気づいてびっくりした、と述べている[6)]。また、「〈山梨〉は県の仕事だったが、市町村自治体と比べると当時の『県』は市民とそうとうの距離があり、『市民参加』が入り込む余地はなかった。だから、いろんな要素が複合できる、快適でコミュニケーションが活発になるような場を立ち上げることを大事にしていた」ともいう[7)]。確かに、基本設計書からソフト作成の主体を読みとることはできず、フルーツ公園はその成立の過程で、多くの公共事業と共通する問題点を抱えていたことがわかった。

1995 年にオープンしたフルーツ公園は、山梨県公園公社によって運営され、2005 年の指定管理者制度の導入以降も、同公社が管理者であった。2009 年、山梨市フルーツパーク株式会社に管理者が変更され、翌年、「山梨県版事業仕分け」によって有料施設だったトロピカル温室が廃止された。2018 年、サービスエリアなどの飲食店を運営する民間企業を中心とする笛吹川フルーツ公園マネジメントグループが指定管理者になり、以後、売店やカフェがリニューアルされた。

(3)フルーツミュージアムの使い手(user)から

笛吹川フルーツ公園には、果樹園やフルーツバスケット（果樹によるオリエンテーリング）があり、梅、さくらんぼ、桃、ぶどうなどの収穫期には、毎年イベントや料理教室が行われてきた。また、山梨農業フォーラム、全農山梨県本部などの農業団体、「東仲倶楽部」「万力山路もりもり研究会」などの地元農家グループ、山梨学院大学や山梨県立大学などの教育機関、やまなし有機農業連絡会議、NPO 法人地球元気村、食を守るママの会 in 山梨、産地とシェフの会、やまなし農業女子などの市民団体、山梨青年会議所、山梨市ふるさと振興機構など地域の団体が公園をさまざまな活動に利用してきたことがわかった。

一方、本研究では、日常的で潜在的な活動に焦点を当てるために、小学生、中学生、高校生、社会人にアンケートを行った。結果の分析は 2022 年度中にまとめる予定であるが、小中学生や

高校生は、概ねフルーツミュージアムの建築にポジティヴなイメージをもっていることがわかった。しかしそれは公園でのアスレチックなどの楽しい体験と連動するものであり、建築の体験を切り分けて抽出することは難しかった。また、フルーツに関する記述はほとんどなかった。「ドームの中のかいだんがくねくねしていておもしろい」「のぼったりおりたり そとが見えるからたのしい」「ドームがとうめいになっていてきれいだった」など、螺旋階段やスロープの動線、ドームの透過性に着目しており、スケッチでは３つのドームそれぞれの特徴を捉えている児童もいて、ドームの形がもつイマジネーションを感じとっていることが伺われた。

一方で大人の意見は、依頼に際して配布した資料を前提としており、感覚的な空間の感受にはとどまらない。山梨市在住の版画家で美術館の教育活動に携わっている雨宮千鶴氏は、バナナやパイナップルがなっていたトロピカル温室の湿気や香りを記憶していたが、この施設は「県の果樹振興との関連性は疑問」とされ2013年に廃止された。また氏は、公園の造成について、「今なら、自然、環境破壊につながると、多くの市民から反対の声が上がるような気がします」と指摘する。山梨市のワイナリーで栽培を担当する鈴木順子氏は、商業色が強い公園に失望したという。これは公園に接する「民活地域」の事業に関する記述であったが、来園者に両者は区別されない。農業において環境問題は喫緊の課題であるため「環境というテーマが当初からあったのであれば、公園運営においてSDGsに適った取り組みを積極的に行い発表する事で全国の公共施設の模範となってほしい」と望んでいる。山梨市の桃農家で育ち木工家具の製作を行なっている丸山博亮氏は、小学生の時にできた公園に、建築の自由さを感じたという。現在は自分の子どもと頻繁に利用し、子どもが無料で一日中遊べる大規模な公園には満足しているものの、建築の利用法は残念だという。山梨大学生命環境学部で園芸科学を研究する矢野美紀氏は、公園がコンクリートで覆われ、地上・地下間の空気の出入りが遮断されていることを問題視し、自然を全身で感じ学べる公園を提案した。また、地下展示室の展示内容が西洋からのぶどうの伝播を中心としているのに対し、地域の気候風土やそれに適合した暮らしのあり方を学ぶ場となるよう望んでいた。公園の大規模な修景への批判や運営への提言は、まさに建築がランドスケープやソフトのネットワークのなかにあり、単独で体験されるものではないことを示すものだった。

引用文献：(1) 多木浩二・長谷川逸子「建築のフェミニズム」『SD』 1985 年 4 月号、『長谷川逸子の思考 3』53 頁。(2) 長谷川逸子「公共建築とコンペティション」『JA』1995 年 3 月号、『長谷川逸子の思考１』45 頁。(3)多木浩二「長谷川スタイルの魅力」『建築文化』1987 年 1 月号、『長谷川逸子の思考３』96 頁。(4)ダン・グレアム・長谷川逸子「公共空間のなかのこどもたち」千葉市美術館・北九州市立美術館『ダン・グレアムによるダン・グレアム』（展覧会カタログ）、241 頁。(5)長谷川逸子『海と自然と建築と』彰国社、2012 年、10, 13 頁。(6) 長谷川逸子・今野裕一・畑祥雄「未来に建築を開いていく　山梨フルーツミュージアムをめぐって」『新建築』1995 年 4 月号、251 頁。(7)長谷川逸子「〈すみだ生涯学習センター〉〈大島絵本館〉〈山梨フルーツミュージアム〉での市民との交流」(2018 年)、比嘉武彦・長谷川逸子「対談　はらっぱの建築」(『特集　長谷川逸子　ガランドウと原っぱのディテール』第三章「原っぱ」『ディテール』2003 年 7 月別冊）に加筆、『長谷川逸子の思考２』32 頁。

４．今後の課題　　（注）必要なページ数をご使用ください。

今後の課題は、上記３.研究の成果(3)の使い手の調査を分析して公表し、意見を得ることである。また、ダン・グレアムとの議論は叶わなかったが、３.(1)の長谷川逸子の公共建築については、長谷川に関する文献だけでなく、同時代の国際的動向（ワークショップ、ランドスケープ・

デザイン、コモン等）のなかでの評価が必要となるだろう。3月のセミナーで議論した、市民として現れてこない人々の公共性や、アジアの建築としての「ランドスケープ・アーキテクチャー」の考え方も、重要な論点となりうる。

なお、感染症の影響などから長谷川逸子・建築計画工房での調査は一度しか行うことができなかった。上記３.(2)山梨県笛吹川フルーツ公園フルーツミュージアムについて、資料は倉庫に収蔵されているとのことであり、さらに調査を進めることで、山梨フルーツミュージアムがもっている可能性を地域の人たちと共有し、ネットワークを活性化したいと考えている。